

## 宮内庁書陵部所蔵宋元版の一考察

黄 華 珍

### Wood-block Books from the Sung and Yuan Dynasties Preserved by *Kunaicho Shoryoubu* of Japan

Huang Huazhen

宮内庁書陵部は、もとの図書寮と諸陵寮とを合わせたもので、日本皇室所蔵の図書と陵墓とに関する事項を司る日本政府の行政機関である。その図書管理の歴史のみについて言えば、文武天皇大宝元年（701）に設立され、当時は図書寮と呼ばれて中務省に所属していた。1884年に宮内省図書寮と改称し、1949年に今の名称となった。資料によれば、この通算千三百年以上の歴史を持つ宮内庁書陵部には、多くの秘蔵があり、中国の宋元時代に刊行された大変貴重な宋元版だけでも百数十点に及んでいる。しかし、一般的な民間図書館ではないので、その秘蔵目録があっても中身の確認はなかなか難しいし、その実物に直接触れるチャンスに恵まれた人も限られている。2001年12月・2003年5月に相次いで中国で出版された『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一・二輯、また今後続刊予定の同書第三輯・第四輯...は、広く一般読者にそれらの宋元版に触れ合うチャンスを提供したといえよう。

2001年2月、筆者は「日本に於ける宋元版の一考察<sup>(1)</sup>」という小論を撰じた際、宮内庁書陵部所蔵の宋元版についても数点触れたが、今回は上記の『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯<sup>(2)</sup>に収めた宋元版を中心に、先行研究を踏まえて、宋元版の例としてそれに関する諸問題を考察しながら、その資料的価値や将来の歴史を明らかにしたい。

『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯に収められたものとして、『呂氏家塾讀詩記』・『初学記』・『論語註疏』・『正法眼蔵』・『集韻』・『四六必用方輿勝覽』・『東坡集・東坡後集』・『花果卉木全芳備祖』の宋版影印本の八点があるので、まずそれらに関することを述べていきたい。

#### 1. 『呂氏家塾讀詩記』

本書は宋の呂祖謙（1137-1181年）によって撰された詩に関係する文献である。呂氏は婺州（今の浙江金華）の人、字は伯恭、その先祖呂好問はかつて東萊郡侯に封じられたため、学界では祖謙を東萊先生と称された。隆興年間（1163-1164年）の進士であり、官は直秘閣著作郎・国史編修に任じられた。南宋中期における有名な理学者であるため、朱熹・張栻と共に「東南三賢」と称せられる。生涯を通じて学術に専念し、經典を考証・注釈しながら、歴史書を編纂した。著述に富み、本書以外にも『古周易』・『春秋左氏伝説』・『東萊左氏博議』・『大事記』・『歴代制度詳説』・『少儀外伝』・『東萊集』などがある<sup>(3)</sup>。

本書は、三十二巻からなり、呂氏にとって重要な代表的作品である。成立時期である宋代では、

大変人気があり、何回も複製された。顧永新の「影印説明」によれば、宋版は次の三つの系統がある。①、朱熹の序文と尤袤の跋文が付いている淳熙江西漕台本。この原本是北京図書館に蔵されているが、『四部叢刊統編』にもその影印本が収められている。②、淳熙江西漕台本に見られる尤袤の跋文によれば、その前に建寧本が出版されたことがある。『天禄琳琅書目』巻一に『東萊家塾讀詩記』は、三十二卷、巾箱本、函十六冊、もとは明代の項元汴が所有したと著録され、更に“乃閩中旧刻”<sup>(4)</sup>と明記されていることによって、これがほかでもなく建寧本であることが明らかである。なお、『天禄琳琅書目後編』巻二では、半葉十二行（毎行二十二字）と十四行（毎行十九字）との宋巾箱本が二部の記録あり、何れも函十六冊。その十四行本は注に諸家の姓氏を引く際に更に皆白文を用い、確かに十二行本と同一版本ではなく、恐らく尤袤がいわれた建寧刻本であろうと明記されている。北京大学図書館も同書宋版を一部蔵しているが、それは莫友芝の旧蔵で、半葉十四行、毎行十九字、それは上記の『天禄琳琅書目後編』に記録された十四行本の条件と一致しているので、これも建寧本であろうと推測される。③、魏了翁の後序がある眉山賀春卿重刻本であるが、今はそれに関する記録や実物はどこにも見当たらない。

因みに、『北京図書館古籍善本書目』<sup>(5)</sup>に著録された『呂氏家讀詩記』の宋版には次の三種類がある。①、『呂氏家讀詩記』三十二卷、宋呂祖謙撰、宋淳熙九年江西漕台刻本、二十冊、九行十九字、小字双行、同白口、左右双边。②、『呂氏家讀詩記』三十二卷、宋呂祖謙撰、宋刻本、十六冊、十二行二十二字、小字双行、同細黒口、四周双边。③、『呂氏家讀詩記』三十二卷、宋呂祖謙撰、宋刻本（卷十五至十六備清初刻本）、十四冊、存二十九卷、一至十七、二十一至三十二。上記の①は宋淳熙九年江西漕台刻本であり、②はその行数によれば、前出した『天禄琳琅書目後編』巻二に記録した十二行本と一致する。③は著録されたデータ（例えば、行数・文字数など）が少ないし、また「存二十九卷」と明記されているため、原物を見ない限り、これは顧永新の「影印説明」に挙げられたもう一部の宋版と同じものかどうかは確認できない。顧永新の説明によれば、もう一部の同書宋版は、持静齋丁氏蔵本であり、「項氏希憲」・「遼西郡図書館印」・「浙西項徳持希憲蔵書」・「毛氏子晋」・「汲古閣」などの蔵書印があり、その一 - 六は上記の②と同様のもので、巻七 - 三十二は別の宋版（十三行、二十五字、注同、細黒口、左右双边。但し、十二行のものも多少あるが、文字のつながりが無い）である。その巻数が足りないことは全然言及されていない。

宮内庁書陵部に蔵されるものが、どちらに属するかについては説が統一されていない。まず、傳増湘は「宋浙本」<sup>(6)</sup>と考えているが、顧永新は「その理由は不明である」と述べている。次に、島田翰は「淳熙尤袤刻本」<sup>(7)</sup>と判断しているが、しかし「淳熙尤袤刻本」の版式（半葉十四行、毎行十九字）と宮内庁書陵部所蔵のもの（半葉十二行、毎行二十二字）とが異なるため、島田翰の判断には疑問の余地がある。因みに、長沢規矩也は宮内庁書陵部に蔵されるものは、「十二行二十二字、小字双行」で、「淳熙」本<sup>(8)</sup>と判断している。顧永新の説明によると、宮内庁書陵部所蔵の同書は、版式、字体などは北京図書館②とあまり変わらないが、ただ一部の文字の書き方の習慣の違いがあるので、同一の版本ではないことが判断できる。宮内庁書陵部所蔵の同書の版式の特徴は建本に近く、その版本の流れから見れば、淳熙本の版式の風格と異なるが、文字の違いは少ないので、それによって複製されたものであり、淳熙本の系統にも属するというのである。

しかし、宮内庁書陵部所蔵の宋版『呂氏家塾讀詩』は二部ある。阿部隆一の研究によれば、二部とも半葉十二行、毎行二十二字である。その①は、「〔宋孝宗朝〕刊南宋後期修〔建安〕」本であり、「普門院」・「艮岳院」・「恵士印膺」・「仁正矣長昭黄雪書屋鑒蔵圖書之印」・「昌平坂学問所」・

「浅草文庫」・「御府図書」などの印あり、巻末に文化五年二月の市橋長昭の寄蔵文廟宋元刻書跋が附綴される。この本は「普門院」の蔵印から察せられる如く、円爾弁円が宋より将来せる本で、「普門院経論章疏語録儒書等目録」に「呂氏詩記 五冊」と著録された本であろう。”そのは、“〔宋淳熙〕刊〔浙〕”本であり、“首に淳熙壬寅九月己卯新安朱熹序の「呂氏家塾讀詩記序」あり”、“巻末に淳熙壬寅重陽後一日錫山九月己卯尤袤書の跋（写刻）が附さる。”“本版の字様は細楷端正の精刻にして、浙版字様の典型たるもの、恐らく江西丘氏原刻本に基づく浙に於ける翻版であろう。その欠画が慎の字に止り、その刻工の李忠が淳熙刊聖宋文選合集（小楷の字様相似）・孝宗朝刊史記集解・紹熙三年越刊礼記正義・嘉泰四年新安郡齋刊皇朝文鑑、紹興年間明州刊紹興淳熙間修文選の原刻・補刻、越刊尚書正義・同周礼疏・孝宗朝贛州刊文選・所謂眉山七史の修に従事し、陳亢が明州刊文選の修に加っていることを考えれば、本版の刊刻は淳熙九年をさげへだてぬ淳熙年間、降っても寧宗朝初より下るものではない。”“古印を削去せる痕があるが、首に「華竹秀而野」（白文）、巻一・二・一一の首及び巻二〇・三二の尾に「鈞」の印記が存する。桂宮旧蔵本。<sup>94</sup>印影などによれば、今回影印出版されたのが、ほかでもなくそのであることは明らかである。そうであるとすれば、阿部がその字様・刻工により「浙版」とした判断に注目しなければならぬ。それは前に触れた傳増湘の「宋浙本」という意見と一致しているので、傳増湘の判断も理由がないわけではない。顧永新が「その理由は不明である」としているのは、恐らく阿部の研究論文を読んでいないし、宮内庁書陵部所蔵の宋版『呂氏家塾讀詩記』は二部ある事実も知らないからであろう。阿部はその刻工名を細かく調査したことがあるので、その判断の信憑性は高いと思われる。但し、影印本を使っている場合、その刻工名は殆ど読めないため、確認できない状態である。なお、顧永新の“每巻首有白文「鈞」印（每巻の巻首には白文の「鈞」印がある）”という説明も厳密さに欠き、影印本により判断すれば、ただその序・巻一二・二一・二六の首または巻一一・二〇・二五・尤袤跋文の尾のみしか見られないのである。これは阿部が述べたのとも多少異なり、その理由は不明である。

なお、日本の『文求堂善本書影』<sup>95</sup>に『呂氏家塾讀詩記』巻第一の書影が一枚収められているが、どこの所蔵かは明らかにされていない。これを宮内庁書陵部に蔵されるそれと照合すると、印刷された文字や版式は全く同じだが、ただ前者は「毛晋」などの印影がはっきり見え、後者には同じ印影が見えない。これによって、両者は同じ版本であろうと判断しても、前者は宮内庁書陵部に蔵されるものではないと思われる。もし「毛晋」などの蔵書印によって判断すれば、恐らく即ち顧永新の説明に言及された持静齋丁氏蔵本の同書宋版であろう。

年代：南宋刊本。

巻数：三十二巻。

板框：縦16.6センチ、横11.4センチ。

格式：序文 四周双辺、版心白口、双黒魚尾、半葉9行、毎行17字。

正文 四周双辺、版心白口、双黒魚尾、半葉12行、毎行22字、注は小字双行。

欠筆字：玄・弦・朗・宏・殷・匡・貞・楨・桓・完・溝・慎等。

印影：「鈞」・「宮内省図書印」等。

来歴：桂宮旧蔵本。

## 2. 『初学記』

本書は唐の徐堅（659-729年）らが勅命を承って編纂した類書である。徐氏は湖州長城（今の浙江長興）の人、字は元固。進士になり、則天・中宗・睿宗・玄宗の四人の皇帝を経て、右散騎常侍・集賢院学士の官職を歴任し、東海郡公に封じられた。徐氏は経史を広く読みあさり、法令制度に詳しく、『三教珠英』・『唐六典』等の大型の官書の編纂にも参与した他、『大隱伝』という作がある<sup>11)</sup>。

本書は、皇子達が勉強する際に、文の出典などを調べる利便を図るため、玄宗が徐堅らに『芸文類聚』の体裁を真似、経書や諸子の書・歴代の詩賦及び唐初の詩文の資料を取り編集させることを命じ、開元十五年（727）に成立したものである。全書は天・歳時・地・州郡・帝王・中宮・儲宮・帝戚・職官・礼・楽・人・政理・文・武・道釈・居処・器物・服饌・宝器・果木・獸・鳥などの二十三部に分け、さらに三百十三箇の子目を設けている。例えば、楽部は上下に分け、上に雅楽・雑楽・四夷楽・歌・舞の五箇の子目、下に琴・箏・琵琶・箜篌・鐘・磬・鼓・簫・笙・笛の十箇の子目に分けている。それぞれの子目は更に歴史故事を記した叙事・対句を集めた事対・古今の韻文詩を集めた詩文の三部分に分けられている。『四庫全書總目』では、その集めた資料の広さは『芸文類聚』に及ばないものの、その精密さが『芸文類聚』以上であると高く評価されている。なお、本書に引かれた書籍は玄宗以前のものであるから、多くの原本がすでに逸した貴重な資料をよく保存している。

宮内庁書陵部に蔵される同書は、南宋紹興四年（1134）福堂劉本の序があり、その序の後に次のような四行の牌記が見られる。

東陽崇川余四十三郎宅今 /  
將監本寫作大字校正離開 /  
並無訛謬収書賢士幸詳 /  
鑒焉紹興丁卯季冬日謹題 /

これによれば、この宋版の種本は監本であるため、初刻本ではなかったと判断できる。また、紹興丁卯は紹興十七年（1147）に当たるが、恐らくその刊行年であろう。但し、現在中国では同書の明・清本のみ見られ、同書の宋版がまったく伝わっていない。これだけを考えても、宮内庁書陵部所蔵の宋版の資料価値は非常に高く、今まで批判が多かった明版の内容の真偽もこれを利用して確認できる。なお、影印本には“慎”という字は欠筆しているような箇所が見られるが、それは恐らく影印の際、文字が不鮮明になったせいであろう。

1962年中華書局がその標点本を出したことがあり、校勘表を付けたほか、『初学記索引』も作られている。

年代：南宋紹興十七年（1147）、東陽崇川余四十三郎宅刊本。

巻数：三十巻、補写あり。

板框：縦19.5センチ、横13.8センチ。

格式：序文 左右双辺、版心白口、半葉9行、毎行12字至14字不等。

目録 左右双辺、版心白口、半葉13行、毎行約33字。

正文 左右双辺、版心白口、半葉12行、毎行22至25字不等、注小字双行 29至30字。

欠筆字：玄・弦・炫・殷・匡・貞・徵・境・竟・驚・桓・恒・講・溝等。

印影：「虎五郎文庫」・「復古堂」・「土屋守楷之印」・「竜蘭」・「佐伯侯毛利高標字培松蔵書画之印」・

「金沢文庫」等。

来歴：金沢文庫旧蔵。

### 3. 『論語註疏』

言うまでもなく、『論語』は儒家の主な經典であり、漢以来その注釈書は多数存在する。本書は、魏の何晏の集解と宋の邢昺の疏との合併と考えられる。十巻あり、その内容は、まず經文、次は集解、次は疏、更に唐の陸徳明の釈文。宋人によって編集された『十三經注疏』にも収められていたが、その通行本は『論語註疏解經』二十巻に作る。

顧永新の「影印説明」によれば、『論語註疏』の版本の主な系統は三つある。南宋蜀大字本『論語註疏』十巻であり、半葉八行、十六字、注・疏二十五字。即ち宮内庁書陵部所蔵のものである。同じ系統のものにはまた元貞本があり、楊守敬が日本を訪問した際、元元貞丙申二年（1296）平陽府刻『論語註疏解經』十巻を見つけたが、それは半葉十三行、二十三或二十四字不等、注・疏並双行三十二字であり、『日本訪書誌』に著録されている。清光緒三十三年（1907）貴池劉氏玉海堂によって影刻した。南宋紹熙浙東庾司刻本であり、『論語註疏解經』二十巻。半葉八行、十六字、注双行二十二或二十三字。現在、台北故宮博物院に残本がある。十行本の『論語註疏解經』二十巻。その刊行年代については、元・明などの数説があり、元刊明修本とされ、北京図書館と台湾図書館に蔵されている。なお、阮元・楊紹和らは、十行本の『論語註疏解經』に対し、南宋刻本説を持っている。陸心源『甌宋樓蔵書志』巻十にも「宋刊十行本」の著録が見え、著録した実物は今日本静嘉堂文庫の館蔵になっている。実は、今世に存在している十行本『論語註疏解經』はすべて元刊明修本であるので、阮元・楊紹和・陸心源三人の著録はすべて間違いである。因みに、平成四年に出版された『静嘉堂文庫宋元版図録』<sup>13</sup>にも十行本『論語註疏解經』は元泰定・致和間刊明正徳通修と著録されている。

要するに、宮内庁書陵部所蔵は、上記の『論語註疏』の十巻本、光宗・寧宗間の蜀刊本であり、金沢文庫の旧蔵である。「字大如錢（文字の大きさがお金のよう）」という蜀刊大字本の特徴を持ち、印刷も大変素晴らしい。魏の何晏『論語集解』と同じ巻数を採り、その元来の形を守っているようである。それに陸徳明の釈文を入れていることも古来評価が高い。長沢は「本書は通行本を校するに、通行本には誤脱臆改頗る多きを知る。「堯曰篇」の如き、特に甚だしきものあり。故に本書は、但に古刻本として尚ぶべきのみならず、内容亦貴重視すべきものとす。」<sup>13</sup>と指摘し、阿部は「この本は…他に同版本の伝存を見ず、海内無双の宝笈として名高く…論語正義は単疏本の伝存はないが、本版は比較的古体を遺し、附された經典釈文も刪節が殆どなく、正義・釈文共に十行本以下の通行本の訛脱を訂正し得る佳処のいかに多きかは、島田翰・張元濟等が既に指摘せる通りである。論語正義現存本中の最古最善本と稱し得る。」<sup>14</sup>と指摘している。

1929年中華学芸社・1930年渋沢栄一氏から影印出版されている。北京図書館には、元刻明修本と明刻本があるだけである。

年代：光宗・寧宗年間（1190-1224年）の蜀刊大字本。

巻数：十巻、補写あり。

板框：縦19.1センチ、横12.6センチ。

格式：左右双辺、版心白口、単魚尾、半葉8行16字、小字25或26字不等。

欠筆字：玄・弦・殷・匡・貞・桓・慎・敦等。

印影：「顧氏定齋藏書」・「定齋」・「構李顧然離叔」・「讀書精舍」・「辛」・「丑」・「御府図書」・「秘閣圖書之章」・「金沢文庫」等。

来歴：金沢文庫旧蔵。

#### 4. 『正法眼蔵』

本書は釈宗杲（1089 1163年）の法語を編纂したものである。宗杲の俗姓は奚であり、宣州（今の安徽にある）の人。その庵号により妙喜とも呼ばれている。後、径山に住み、王朝の政治を議論したため不幸を招き、高宗の紹興十一年（1141）度牒が破られて衡陽（今の湖南にある）に逃げ、同二十六年（1156）十月詔によって梅陽へ移住させられた。後に恩赦を得、孝宗より「大慧禪師」の号を賜った。本書以外の著作に『臨濟正宗記』がある<sup>15</sup>。

本書は三巻あり、宗杲が衡陽に閑居した際、他の僧侶との交流により生じた百余篇の法語をまとめたものである。南宋紹興十七年（1147）においてその弟子の冲密慧然がそれを抄録し、間もなく刊行した。日本では、宮内庁書陵部所蔵の一部（三巻、三冊）以外、静岡旭伝院岸沢文庫にも嘉熙元年（1237）刊行された宋版が一部（三巻、六冊）あるそうであるが、詳細は不明である。なお、建仁寺両足院に五山版の『正法眼蔵』が蔵されている。それは宋版によって覆刻されたものであり、一部しか残っていないという。現在、中国にも明版しか残っていない。

年代：南宋紹興十七年（1147）刊本。

巻数：三巻、中巻補写あり。

板框：縦18.5センチ、横11.4センチ。

格式：左右双辺、版心白口、単魚尾、半葉11行、毎行20字至21字。

欠筆字：玄・恒・驚・擎等。

印影：「金地院」等。

#### 5. 『集韻』

本書は宋の丁度（990 1053年）らが勅命を承って編纂した韻書である。丁度は祥符（今の開封）の人、字は公雅。仁宗のとき、瑞明殿学士の官職に任じられた後、参知政事・観文殿学士・尚書左丞などを歴任した。学術に精通し、著に『邇英聖覽』・『龜鑑精義』・『編年総録』・『礼部韻略』・『貢举条式』などがある<sup>16</sup>。

宋の初めごろに編集された『広韻』に対し旧文が多く用いられ、繁雑と簡略とが当を得ないという批判の声が多いため、景祐元年即ち1034（旧説は景祐四年、1037）仁宗の命により丁度らが『広韻』を改めて修訂し、宝元二年（1039）に全書を完成し、詔により『集韻』と改称された。

『切韻』・『広韻』より多くの文字を収め、五万三千五百二十五字に及んだが、それぞれの正字のみ収めるのではなく、根拠あるものは、古字・俗字なども収める。その注釈は『広韻』より簡略化され、一部の文字の所属する部や反切も『広韻』と異なったところがある。これは恐らく当時の言葉の音韻により、古音・方言の音とも配慮を加えて工夫したためであろう。その編集の体裁や音韻の体系は確かに『広韻』とあまり変わらないものの、膨大な数の文字を収めたため、字体や発音を研究する際には、欠くことができないものとなっている。問題が多いという指摘は清以来の研究者にもしばしば見られるが、それは方成珪『集韻考正』、陳準『集韻考正校正』などを参照されたい。

『集韻』の宮内庁書陵部所蔵は南宋孝宗淳熙十四年（1187）金州（今の陝西安康にあたる）軍刻本である。その巻十の後ろに「慶曆三年（1043）八月十七日雕印成，延和殿進呈，奉聖旨送国子監施行」という牒文及び賈昌朝ら三人の銜名が見られる。最後にある金州駐節御前諸軍都統制田世卿の跋文には、今回刊行されたものの種本は「蜀本」とし、また「中原平時舊本」を以って校勘し、その上『説文』・『爾雅』などによって誤りを正したと述べられている。この他、『集韻』にはまた次のような二種類の宋版がある。は南宋初年明州（今の浙江寧波）で刊行され、南宋中期に修訂されたもので、清以来相次いで銭曾・怡王府・翁同龢の旧蔵となり、後海外に流出したことがあるが2000年上海図書館の館蔵になった。文物出版社が1996年に影印出版した。は南宋孝宗期の湖南刻本であり、北京図書館に蔵されている。明・清とも紫禁城の旧蔵で、『文淵閣書目』と『天祿琳琅書目続編』とに著録がある。中華書局が1985年に影印出版され、『古逸叢書三編』にも収められている。その詳細は顧歆芸の「影印説明」を参照されたい。

現存の三種類の宋版は、いずれも貴重なものであるが、宮内庁書陵部の所蔵は、他の宋版と比べ、牒文・銜名・跋文などが完全に残っている。そこから『集韻』初刻本（慶曆三年，1043）、蜀本と中原平時舊本の情報が読み取れ、『集韻』の成立歴史の研究に大変参考になり、『四庫全書総目』の誤りも正すことができる。しかし、残念ながら、その初刻本・蜀本・中原平時舊本は何れもこの世から姿を消している。

年代：宋淳熙十四年（1187）金州軍刊本。

巻数：首巻が欠け，二 - 十巻のみ現存。

板框：縦28センチ，横19.7センチ。

格式：左右双辺，版心白口，単黒魚尾，半葉10行，小字双行29至31字。

欠筆字：玄・弦・敬・驚・宏・殷・匡・恒・慎等。

印影：「蟠桃院」・「佐伯侯毛利高標字培松蔵書畫之印」・「金沢文庫」・「秘閣圖書之章」・「帝室圖書之章」等。

来歴：金沢文庫旧蔵。

## 6. 『四六必用方輿勝覽』

本書は南宋の祝穆によって撰されたものであり，七十巻。祝氏は建陽（今の福建にある）の人，初名は丙，字は和父（甫），親戚である朱熹に学んだが，地理を大変好み，本書以外は、『事文類聚』などの著書がある<sup>17)</sup>。

本書は，経史子集・稗官小説・金石・郡志・図経から資料を広く取り，南宋における十七路の行政区により，それぞれの管轄している府・軍・州を記したうえで，郡名・風俗・形勝・土産・山川・学館・堂院・亭台・楼閣・軒榭・館駅・橋梁・寺觀・祠墓・古跡・名宦・人物・名賢・題詠・四六の子目により多くの資料を分類記入したもので，南宋における特色ある地理書であり，現在でも参考価値が高い。但し，資料の考証は杜撰なところがあり，間違いがないわけではない。

本書の刊行については，その呂午の序と祝穆の自序との何れも「嘉熙己亥」と明記しているので，その初刻本はこの年即ち「嘉熙三年」（1239）において刊行されたと考えられる。全書は前集四十三巻，後集七巻，続集二十巻，拾遺一卷，分類詩文目一卷。前・後・続集各巻の題名は何れも「新編四六必用方輿勝覽」とするが，拾遺巻は「新編四六必用方輿勝覽拾遺附録」とし，分類詩文目は題名がなく，「今具引用文集于后」と明記される。拾遺巻と分類詩文目との間に市橋長昭

の「寄藏文廟宋元刻書跋」(三亥,即ち市河米庵書)がある。宮内庁書陵部に蔵されているのはまさにこの初刻本であると判断される。文章には皇帝や朝廷に関わっている語があると空格を作る。なお,南宋度宗咸淳三年(1267),祝穆の息子祝洙がこれを修訂した上で,改めて刊行した。その編集方法は多少変わり,例えば,前集・後集・続集という分け方がなくなり,内容も増加され,全書七十巻,題名も『新編方輿勝覽』と変わった。1980年台北文海出版社,1986年上海古籍出版社より影印出版されたことがある。

年代:南宋理宗嘉熙三年(1239)刊本。

巻数:七十巻。

板框:縦17.9センチ,横11.9センチ。

格式:「兩浙轉運司 録白」 左右双辺,版心白口,半葉10行,毎行17字。

呂午の序 左右双辺,版心白口,半葉4行,毎行9字。

「新編四六必用方輿勝覽総目」 左右双辺,版心白口,半葉14行,毎行字数不等。

祝穆の自序 左右双辺,白口,半葉5行,毎行11至14字。

正文 左右双辺,半葉7行,大字字数不等,注小字双行25字。

欠筆字:玄・弦・篋・講・溝・桓・慎・廓等。

印影:「浅草文庫」・「昌平坂学問所」等。

## 7. 『東坡集・東坡後集』

この書名を見て,直ちに分かるように,本書は蘇軾(1037-1101年)の詩文集である。蘇氏は眉州眉山(今の四川)の人で,字は子瞻,号は東坡居士・鉄冠道人・静常斎・雪浪斎。嘉祐二年(1057)弟の蘇轍と共に進士に合格。その後,相次いで大理評事鳳翔府簽判・監官告院・杭州通判・密州太守・徐州太守・湖州太守などの官職に任じられた。元祐四年(1089)龍図閣士を拝し,杭州の知事となり,在職期間中頗る付きの成績をあげた。生涯に数回失脚したことがあり,紹聖(1094-1098)年間,惠州・瓊州(今の海南島)まで流刑されたが,恩赦に会って翌年の建中靖国元年(1101),内地に戻る途中病気のため常州でこの世を去っている。

蘇氏は非凡な才能を持ち,文学・絵画・書道などの何れの分野にも優れた業績があり,思想面には儒・道・釈の影響が見られ,複雑な様相を呈しているが,中国文学史上無視できない存在であり,人々に愛された大文豪である。父の蘇洵と弟の蘇轍と並び“三蘇”と称され,いずれも唐宋八大家に入られている<sup>18)</sup>。

楊忠の「影印説明」に述べているように,宋代において蘇軾の詩文集の出版は次のような三つの系統がある。その一は分集によって一部に編集されたもの(例えば『東坡集』四十巻・『後集』二十巻...などの六集本,または七集本),その二は文の体裁によって一部に編集されたもの(例えば,詩・賦・論・策・序・書・表などに分類されている),その三は補遺的なもの(例えば,『東坡別集』・『外集』など)。その内,二はよく校訂され,最も広く伝わっているもので,学界に重んじられている。その宋刻本については,今日考証できるものは京師本・杭州本・居士英刻本(乾道前刻本)・建安本(孝宗朝)・蜀本(大字本)・曹訓刊本(光宗以後)・黄州本(寧宗以後)・宋刻大本(大字本)・小字大本(小字本)の九種である。蘇軾の生前,北宋時代に刊行されたのは,京師本・杭州本の二種しかないが,他の七種は何れも蘇軾の没後,南宋時代に刊行されたものである。



宮内庁書陵部に蔵されているのはと同じ系統の分集によって一部に編集されたもので、書式は建安本以外の六種と異なり、巻首には宋孝宗の「御製文集贊並序」があり、文章には皇帝や朝廷に関わっている語があると空格を作り、“慎”という文字までは欠筆字を用いていたが、“惇”という文字は欠筆にしていない。これらの事情を考えた上で、楊忠の乾道九年作の「御製文集贊並序」が付いているのは建安本のみであるから、宮内庁書陵部に蔵されているものも建安本のはずであり、また孝宗朝の刻本であると推定される。なお、本書の末尾に市橋長昭の「寄蔵文廟宋元刻書跋」(三亥、即ち市河米庵書)がある。

年代：孝宗朝(1163-1189年)刊建安本。

巻数：「東坡集」一 - 三十三・三十七 四十巻、「後集」一 - 八巻現存。

板框：縦20.2センチ、横13.4センチ。

格式：「御製文集贊並序」 四周双边、版心白口、単魚尾、半葉8行、毎行16字。

目録及び正文 左右双边、版心白口、単魚尾、半葉10行、毎行18字。

欠筆字：玄・弦・殷・匡・貞・桓・完・慎等。

印影：「越園文学」・「清絢之印」・「君錦」・「仁正侯長昭黃雪書屋鑿蔵図書之印」・「浅草文庫」・「昌平坂学問所」・「宮内省図書印」・「金沢文庫」等。

来歴：金沢文庫旧蔵。

## 8. 『花果卉木全芳備祖』

本書は宋の陳景沂によって撰され、祝穆によって訂正された植物に関する類書である。陳氏は浙江天台の人であり、肥遯・江淮肥遯愚一子と号した<sup>19)</sup>。修訂者の祝穆については前文『四六必用方輿勝覽』に関するところでふれたので、ここは略す。

本書は全集二十七巻と後集三十一巻からなり、花草・樹木・穀物などに関する故事や詩賦を多く集めたものである。前集に花卉、後集に果部九巻、卉部三巻、草部一巻、木部六巻、農桑部三巻、蔬部五巻、薬部四巻に分けられ、部の下は若干の門、門の下は若干の子目に分けられ、次にまた事実祖と賦咏祖の二種類が並んでいる。事実祖の下に碎録、紀要、雑著の子目があり、賦咏祖の下にまた五言、七言の散句、散聯、古詩、八句、絶句などがある。理路整然とし、内容も豊富に網羅されている。世界で最も早く編集された植物に関する専門の辞書であり、明清時代の『群芳譜』・『広群芳譜』の種本でもある。

本書は南宋理宗宝祐年間(1253-1258年)において刊行されたものの、中国では、すでに紛失しているため、清抄本しか見られない。宮内庁書陵部に蔵されるものは足本ではなく、前・後集合わせて四十一巻だけが存されているが、世に残っている唯一の同書の宋刻本であるため、非常に貴重なものとなっている。1982年2月、農業出版社より影印され、『中国農学珍本叢刊』に入れられている。

年代：南宋理宗宝祐年間(1253-1258年)刊本。

巻数：「前集」巻十四 - 二十七、「後集」目録及び巻一 - 十三、巻十八 - 三十一、合計四十一巻だけ現存。

板框：縦17.9センチ、横11.9センチ。

格式：序文 左右双边、版心細黒口、半葉13行、毎行24字。

欠筆字：玄・弦・殷・匡・貞・桓・完・慎等。

印影：「佐伯侯毛利高標字培松藏書画之印」・「帝室図書之章」等。

## 二

『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯に収めた元版影印本は、『詩童子問』・『新編排韻増廣事類氏族大全』・『禅宗頌古聯珠通集』・『史記』・『寒山詩集』・『中州集』の六点があるので、まずそれぞれに関することを述べていきたい。

### 1. 『詩童子問』

本書は宋の輔広によって撰されたものである。輔氏は、字は漢卿、号は潜庵。趙州慶源の人、南に移住し崇徳に住んだ。呂祖謙・朱熹に師事し、朱熹に深く重んじられた。伝貽書院を築き、学者に教授するので、時人に伝貽先生と称された。本書以外、『四書纂疏』・『六経集解』・『通鑑集義』・『潜庵日新録』などの著がある<sup>3)</sup>。

本書には二十巻本と十巻本の二種がある。前者は元至正四年(1344)「崇化余志安刻於勤有堂」の刻本であり、後者は明崇禎間(1628-1644年)虞山毛氏汲古閣刊本である。宮内庁書陵部の所蔵は前者と同様のものであるが、巻首の「胡一中序」・「朱子詩伝童子問師友粹言」・「之望序」・「至正甲申刊記」・「詩伝童子問協韻考異」・「十五国風地理之図」・「朱氏詩伝綱領」は補写であり、次の「詩序」は原刻である。巻一補写、巻二欠。巻三より巻二十まで原刻であるが、巻三の巻尾には「詩巻第四」、巻四の巻尾には「詩巻第三」とそれぞれ誤刻され、巻五の巻首には「詩巻第」三字のみしかない。

なお、台湾中央図書館には元版の『詩童子問』二十巻本の残本(十三巻以下欠)が見られるが、それは北平図書館(今の北京図書館)の旧蔵である。現在、『北京図書館古籍善本書目』にはその二十巻の明抄本のみ著録されている。また、『中国古籍善本書目』・阿部隆一・森立之の著録によれば、上海図書館・尊経閣文庫・崇蘭館にもそれぞれ元版が蔵されているという。

年代：元至正四年(1344)刊本。

巻数：二十巻。巻首(「詩序」以外)・巻一補写であり、巻二欠。

板框：縦24.7センチ、横15.7センチ。

格式：四周双辺、版心黒口、双魚尾、半葉11行、毎行21字、注は小字双行。

印影：「林氏蔵書」・「述斎衡新収記」・「昌平坂学問所」・「文化丁丑」・「大学蔵書」・「浅草文庫」・「書籍館印」・「帝室図書之印」・「日本政府図書」等。

### 2. 『新編排韻増廣事類氏族大全』

本書は撰者の名前が明記されていないが、内容から元人によって撰されたものと判断できる。全書は六百四十七姓の四万七千二百余人の資料を収め、八十四箇の韻を用いており、大変重要な歴史や言語などの資料であることを窺わせる。

現に存する同書元刻本は四種類あり、その詳細は曹亦氷の「影印説明」に譲るので、ここではそれを省く。宮内庁書陵部の所蔵は、元刻の十巻本であり、全巻揃いの珍稀本でもある。また他の元版に見られない内容を収めているので、頗る校勘価値を有する。同書の元版は北京大学図書

館にも蔵されるが、遺憾ながら残本である。なお、華東師範大学の館蔵には『精刻京本排韻増廣事類氏族大全』という書名を付けている同書二十八巻の明刻本がある。

年代：元代刊本。

巻数：十巻。

板框：縦21.8センチ，横12.3センチ。

格式：四周双辺，版心白口，双魚尾，半葉10行，每行20字，注小字双行。

印影：なし。

### 3. 『禅宗頌古聯珠通集』

本書は、初め南宋の池州報恩光孝禅寺の沙門法応によって集録され、南宋孝宗の淳熙年間池州で刊行されたことがある。但し、宮内庁書陵部所蔵の同書元刻本は、元紹興の天衣万寿禅寺の沙門普会によって集録し続けられたものであり、七巻（巻一、二、四、六、七、九、一〇）が残っている。集録された資料は大変豊富で、禅宗の機縁に関する故事や釈迦の偈頌の淵藪となったが、数百年間、本書は世にあまり知られていなかったために、『四庫全書総目』にも著録されていない。『北京図書館古籍善本書目』に著録された同書元刻本は一種（「十行，二十字，白口，左右双辺」）あるが、一巻だけ残っている。

なお、書尾には「徒弟比丘壽康募縁成就」と明記されている。また、影印本ではあまりはつきりしないが、楊忠の「影印説明」によれば、その魚尾の上には「頌古一」、「頌古二」などの文字が見え、魚尾の下には頁数があり、その中縫には「古杭善女人錢氏妙圓助」や「杭州福田宮道士王元裕助」などの助成記録がある。本書は仏教の書物でありながら、出版当時、道教の道士さえも助成金を出したという点、極めて興味深いものである。

年代：元代刊本。

巻数：巻一、二、四、六、七、九、一〇のみ現存，補写あり。

板框：縦18.5センチ，横12.3センチ。

格式：序文 四周双辺，半葉8行，每行18字。

正文 左右双辺，版心白口，双魚尾，半葉10行，每行20字。

印影：「金地院」・「御府図書」等。

### 4. 『史記』

本書は司馬遷によって撰された歴史書であり、世に広く知られた書物であるので、ことさら紹介の必要はないであろう。ただ漢代に成立したものであるのに、なぜ元版が重要なものになるかについて説明しなければならない。

安平秋の「影印説明」によれば、彭寅翁によって出版されたこの『史記』は、南宋慶元二年（1196）後、南朝の宋・裴駰の「集解」と、唐代の司馬貞の「索隱」と、唐代の張守節の「正義」とを集めて『史記』の本文の下に入れた三家注の合刻本の二番目であり、元代の唯一の三家注の合刻本である。この刻本は現在九部残っており、中国には三部（北京図書館二部，北京大学図書館一部），台湾には二部（二部とも台北中央図書館），日本には四部（宮内庁書陵部二部，天理図書館一部，慶応義塾大学図書館一部）があるが、その中で、今回影印された本書は八葉が抄補したものである。

が、比較的揃っているものであるといえる。なお、その末尾に「至元戊子菴節吉州安福 彭寅翁新刊于崇首精舎」と明記されているので、元至元二十五年（1288）の刊本であることが分かる。

年代：元至元二十五年（1288）刊本。

巻数：百三十巻，八葉の補写あり。

板框：縦18.6センチ，横12.1センチ。

格式：目録と序文 左右単辺，版心黒口，双魚尾，半葉9行，毎行18字。

正文 左右単辺，版心黒口，双魚尾，半葉10行，毎行21字，注は小字双行。

印影：「秘閣図書之章」・「御府図書」等。

## 5. 『寒山詩集』

本書は寒山によって撰されたものであるが、豊干・拾得の詩も入っている。寒山は、唐の高僧であり、隱逸の詩人でもあるが、その名前や生卒年などは不明である。長い間、浙江天台山国清寺附近の翠屏山（また寒岳、寒山と呼ぶ）に隱居し、寒山または寒山子と自号した<sup>21</sup>。

劉玉才の「影印説明」によれば、寒山詩は宋代にすでに数回出版されたことがあり、現存するものとしては、『四部叢刊』に影印された明の毛晋の汲古閣蔵宋版、国清寺本（東皋寺本、無我慧身本の種本）、宝祐三年（1255）本、の三種がある。

その内、最も世に広く伝わっていたものは、国清寺本である。それは南宋淳熙十六年（1189）に国清寺の僧侶志南が寒山・豊干・拾得の作とされる詩を集め、それに「『三隱集』記」及び朱熹と南老（志南）の帖を付けて刊行されたものである。東皋寺本とは、南宋紹定二年（1229）に東皋寺の僧侶無隠が国清寺本を校勘し、さらに陸游と明老（釈可明）との帖を入れて刊行したものである。この経過については、釈可明の跋文に説明がある。無我慧身本とは、僧侶無我慧身が寒山の長編序詩を見つけたため、それを東皋寺本に入れて刊行したものである。宮内庁書陵部の所蔵はこの無我慧身本である。その「寒山序詩」の末に次のような無我慧身の跋語が二行ある。「曩閱東皋寺『寒山集』，缺此一篇。適獲聖製古文，命工刊梓，以全其璧。觀音比丘無我慧身敬書。（昔東皋寺の『寒山集』を読んだが、この篇が欠けていた。丁度聖製古文を獲得し、それを完璧にするため、刻工に刊行させた。觀音比丘無我慧身謹んで書く。）」

日本では、明治三十八年に島田翰校訂、民友社出版の『宋大字本寒山詩集・永和本薩天錫逸詩』<sup>22</sup>が見られ、「拋島田翰手校内府宋大字本範鉛模勒」と明記されているが、その『寒山詩集』が宋版かどうか疑問の余地がある。なぜならば、今回の影印本と同じ特徴を持つからである。

年代：元代刊本。

巻数：「寒山詩」一卷，附「豊干・拾得詩」一卷。

板框：縦21.1センチ，横13.3センチ。

格式：巻首「寒山序詩」半葉6行，毎行12字。

「寒山子詩集序」左右双辺，半葉9行，毎行15字。

正文 左右双辺，単魚尾，半葉8行，毎行14字。

欠筆字：玄・胤・恒・貞・殷・郎等。

印影：「慶福院」・「無範」・「植村書屋」・「霞亭珍藏」・「暢春堂図書記」等。

## 6. 『中州集』

本書は元好問(1190-1257年)によって編纂されたものである。元氏は金代(1115-1234年)の秀容(今の山西忻県にあたる)の人、字は裕之、号は遺山。七才にして詩をよくし、興定(1217-1222年)中進士となり、官は尚書省左司員外郎などに任じられた。金の滅亡後、仕官せず、詩文を以って一代の師匠となり、世に元才子と称せられた。晩年、著述に専念し、本書以外では、『遺山集』・『統夷堅志』・『唐詩鼓吹』・『唐詩鼓吹注解』の作がある<sup>23</sup>。

本書の成立は、金王朝が滅亡後のことであるが、金代の249人の詩、凡そ2259首を選び、それに「中州楽府」一巻を作りその巻末に加えて編集した。中州出身作者が多いため、この書名を付けたという。『北京図書館古籍善本書目』には元・明刻本ともそれぞれ四点を著録しているが、その内訳は、前者はいずれも「元至大三年(1310)曹氏進徳齋遞修本」の残本であり、後者は「明の弘治九年(1496)李瀚刻本」の一点と「明末毛氏汲古閣刻本」の三点の完本である。但し、同じ曹氏進徳齋遞修本と同じ汲古閣刻本でも異なるところがあるが、煩瑣を避けたいため、その詳細は『北京図書館古籍善本書目』を参照されたい。

ところが、宮内庁書陵部の所蔵は、巻首には作者元氏の「中州集引」があり、次に「乙卯新刊中州集総目」があり、巻末には張輝の後序があり、また「中州楽府」一巻が付されている。乙卯は至大三年(1310)より五年遅れ、延祐二年(1315)に当たり、それが宮内庁書陵部所蔵の『中州集』の刊行年代であろう。

年代：元延祐二年(1315)刊本。

巻数：十一巻。

板框：縦20.5センチ、横12.8センチ。

格式：中州集引 四周双辺、半葉8行、毎行16字。

総目・正文 四周双辺、半葉15行、毎行28字。

印影：「御府」・「石清水神宮寺大丘大律院常住」等。

## 三

以上考察したのは、宮内庁書陵部所蔵の書物の一部に過ぎないが、これらの書物の考察を通じ、日本における宋元版に関する多くの問題の理解に大変参考になると思われる。ただ影印本を用いているので、原本を用いている場合と異なり、例えば、その版心や印影などの内容の確認は非常に難しく、読み取れない場合もしばしばあった。

さて、次に若干の問題を議論してみよう。

## 1. 上記の宋元版の将来時期について

周知のように、宋代には遣隋使・遣唐使のような形の交流は存在しなかったため、両国の交流を支えてきたのは、仏教の僧侶や商人などを中心とした民間人であった。上記の宮内庁書陵部所蔵の宋元版は何時日本に将来されたか、また誰によって将来されたかについては、はっきり分からないが、それぞれの書物に押された印影に沿って追跡すれば、その伝来ルートや保存の歴史などが多少読み取ることができる。例えば、「金沢文庫」などの印影が押されたものが数点ある。

金沢文庫とは、建治元年(1275)前後、北条実時(1224-1276年)により武蔵国金沢庄に設けら

れた文庫であり、足利学校と並んで鎌倉時代の文教興隆に貢献した文庫でもある。しかし、元弘三年（1333）北条氏滅亡後、その蔵書は同所の称名寺に移り、寺の衰退と共に散逸がおびただしく、一部は徳川家康（1542-1616年、1602年富士見亭文庫が創立されたが、1639年家光によってその蔵書を紅葉山文庫に移した。）や前田綱紀（1643-1724年、尊経閣文庫の礎を築いた人物）らの蔵書となった。今の金沢文庫は、1930年神奈川県立金沢文庫として再興したものである。

金沢文庫の歴史を考えれば、その館蔵になったことがある宋元版は、遅くとも北条氏滅亡後の元弘三年（1333）までに将来されたものであろう。更に細かく考えれば、金沢文庫を設けた1275年前後は、ちょうど宋（960-1278年）滅亡の直前であり、1333年も宋滅亡から間もない元代である。従って、金沢文庫の館蔵であったものは、宋或いは元において将来されたものであるに違いないと思われる。

『金沢文庫本之研究』<sup>24</sup>には、金沢文庫旧蔵の来歴についての資料がある。参考のため、上記に考察した数点の宋版に関するもののみそのまま記す。

、『初学記』については、「文政中毛利出雲守高翰の幕府献上本の一なり。」

、『論語註疏』については、「慶長七年徳川家康によって富士見亭文庫に移出せられたるものなり。」

、『集韻』については、「文政中毛利出雲守高翰幕府献上本の一。一時、京都妙心寺支院蟠桃院の有に帰し、後毛利高標の架蔵に入りたるものならん。」

、『東坡集・東坡後集』については、「儒者清田君錦旧蔵。文化五年下総守市橋長昭その所蔵にかかる宋元版三十種を幕府に献ず。此本はその一なり。尾に長昭の寄蔵文廟宋元刻書の跋あり。」

上記の資料によれば、これらの宋元版は金沢文庫より流出後流転し、最後に宮内庁書陵部所蔵の日本へ将来伝承の古い秘籍である。

なお、『内閣文庫百年史』<sup>25</sup>には、明治二十四年四月十五日「内閣文庫貴重図書（二九九五六冊）を宮内省へ移管」、同二十六年一月二十七日「内閣文庫貴重図書（二八八冊）を宮内省へ移管」という記録がある。その詳細は明記されていないが、恐らく宋元版もその中に入っていると思われる。

いずれにせよ、宮内庁書陵部所蔵の宋元版は、古くからすでに日本に将来されたものが多く、しかも金沢文庫や浅草文庫などの旧蔵も多く見られる。

## 2. 上記の宋元版の資料価値について

宋元版の全体の価値については、簡単に言えば、年代の古さによって決められた文化財的価値、その内容自体が持つ高い学術的価値、字体や書道研究上の価値、などが挙げられる。

本稿で挙げられているものは、すべて宋代において刊行された、凡そ630～900年前後のものであり、勿論その文化財的価値を持っている。また、それらの書物は、その故郷である中国では、早くから逸したか或いは残本しか残っていないため、その資料価値・校勘価値は極めて高い。なお、書物によって印刷の品質が違うものの、美しい文字で印刷され、また当時の字体を多く収めた宋元版は、言うまでもなく、書道研究や字体研究上にも価値がある。

## 3. 上記の宋元版に見られる諱字について

宋版を話題にすれば、諱字の問題に触れなければならない。宋代では、諱字を厳しく要求した

ため、それが宋版の重要な特徴の一つとなっており、文章には皇帝や朝廷に関わっている語があると空格や欠筆などを行っている。これを利用してその書物の彫版印刷年代を判断することが出来る。但し、これには種々複雑な問題が絡むため、判断には慎重を期すべきである。実物調査をすれば分かることだが、同じ宋版で、同じ書物であっても、同一文字が欠筆であったり、欠筆していなかったりする現象が普通に起こるからである。

元版では諱字は使われていないといわれているが、一部の宋版の覆刻本は種本の諱字をそのまま使っているし、一部の著者には異民族の支配に反抗する立場に立って、元代になってからも宋代の諱字をそのまま使っているものもある。上記の元版『寒山寺』が諱字を使っているのは、やはり宋版の覆刻本の関係からであろう。勿論、このような諱字は年代の判断の根拠にはならない。

#### 4. 上記の宋元版の影響について

長い間、中国の古典は日本人の文化生活など各方面に大きな影響を与えたことは確かである。宮内庁書陵部所蔵の宋元版も例外ではなく、貴族達が中国文化の理解に大きな役割を果たしたと想像できる。しかし、宮内庁書陵部は一般的な図書館ではないから、その秘蔵を直接利用する人は限られているといえよう。

鎌倉末期から室町末期にかけて、京都・鎌倉の五山を中心とした禅僧などによって開版された五山版には『寒山詩集』・『正法眼蔵』・『中州集』などが見られる。この他、『呂氏家塾読詩記』・『集韻』・『東坡詩集』・『東坡文集』・『詩童子問』・『史記』などの和刻本が何種類も出版されたことがある。それらの種本が宮内庁書陵部所蔵のものかどうかはともかくとしても、宋元版の同書の内容が広く伝わってきたことや日本人の生活に影響を与えた事実を証明することができるものである。

今回の考察は『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯の範囲に止めたが、全体のボリュームが27函118冊にもなり、その殆どが経・史・子・集に関係するので、大変複雑な様相を呈している。宋元版の影印本としてのみ見れば、満足できないところ（例えば、印影・刻工名などがはっきり見えない）も多かったが、その書物の原貌の理解には大いに役に立つといえる。宋元版の研究をライフワークとする筆者にとっては、今回の考察は日本に於ける宋元版のごく一部であるが、それでもまだ不明なところが沢山あった。今後とも調査・研究を続ける所存である。

#### 注 釈

- (1) 黄華珍「日本に於ける宋元版の一考察」(『岐阜聖徳学園大学紀要』第40集所収, 2001年2月)。
- (2) 『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯(線装書局 2001年12月)。因みに、後文に度々言及した顧永新・顧歆芸・楊忠・曹亦冰・安平秋・劉玉才らの「影印説明」及び各書の板框のデータはすべてこの第一輯に収められた資料であるので、煩瑣を避けるため、以下一々注することはしない。
- (3) 『宋史』(中華書局, 1977年11月) 卷四百三十四。
- (4) 『天祿琳琅書目』巻一にある原文は「乃閩中旧刻」ではなく「猶屬閩中旧刻」である(于敏中ら『天祿琳琅書目』, 彭元瑞ら『天祿琳琅書目後編』など, 清人書目題跋叢刊十, 中華書局, 1995年8月)。後者は前者より推測のニュアンスが強いと思われる。
- (5) 『北京図書館古籍善本書目』(北京図書館編, 書目文献出版社)。
- (6) 『蔵園訂補部亭知見伝本書目』巻二経部三の記載による。なお、原本は未見。

- (7) 島田翰『古文旧書考』(台湾広文書局影印本, 1967年8月)。
- (8) 『長沢規矩也著作集』第三卷(汲古書院, 1983年7月)。
- (9) 『阿部隆一遺稿集』第一卷(汲古書院, 1993年1月)。
- (10) 『文求堂善本書影』に載せていた『呂氏家塾讀詩記』の書影については、『宋元版刻図録』(学苑出版社, 1967年8月)の269ページを参照。
- (11) 『旧唐書』(中華書局, 1975年5月)巻一百二, 『新唐書』(中華書局, 1975年4月)巻一百九十九。
- (12) 『静嘉堂文庫宋元版図録』(汲古書院, 平成4年4月)。
- (13) 前出注<sup>(8)</sup>『長沢規矩也著作集』第三卷。
- (14) 前出注<sup>(9)</sup>『阿部隆一遺稿集』第一卷。
- (15) 諭謙『新統高僧伝四集』(琉璃経房, 1967年5月)巻十二。
- (16) 前出注<sup>(3)</sup>『宋史』巻二百九十二。
- (17) 『四六必用方輿勝覧』呂午序, 紀昀・陸錫熊・孫士毅ら『欽定四庫全書總目』(整理本)(中華書局, 1997年4月)。
- (18) 前出注<sup>(3)</sup>『宋史』巻三百三十八。
- (19) 前出注<sup>(17)</sup>『欽定四庫全書總目』(整理本)。
- (20) 『宋元学案』(『黄宗羲全集』第五冊, 浙江古籍出版社, 1990年8月)巻六十四。
- (21) 前出注<sup>(17)</sup>『欽定四庫全書總目』(整理本)。
- (22) 『宋大字本寒山詩集・永和本隆天錫逸詩』(島田翰校訂, 民友社出版, 明治38年7月)。
- (23) 『金史』(中華書局)巻一百二十六。
- (24) 『金沢文庫本之研究』(関靖・熊原政男, 青裳堂書店, 昭和56年12月)。
- (25) 『内閣文庫百年史』(増補版)(国立公文書館編集, 汲古書院, 昭和61年7月)。

## 参 考 文 献

- 張秀民『中国印刷史』(上海人民出版社, 1989年9月)。
- 椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』(大東出版社, 1993年8月)。
- 『中国版刻図録』増訂本(北京図書館編, 文物出版社, 1990年5月)。
- 森立之『経籍訪古志』(台湾広文書局影印本, 1981年7月)。
- 楊守敬『日本訪書志』(台湾広文書局影印本, 1981年8月)。
- 董康『書舶庸譚』(台湾広文書局影印本, 1981年8月)。
- 楊家駱『四庫全書大辞典』(中国書店, 1987年1月)。
- 長沢規矩也『和刻本漢籍分類目録』(汲古書院, 昭和51年10月)。
- 『和漢図書分類目録』(上, 下)(宮内庁書陵部, 昭和27年3月と同28年3月)。
- 瞿鏞『鉄琴樓藏書目録』など(清人書目題跋叢刊三, 中華書局, 1990年3月)。
- 錢侗『書目統編崇文總目輯釈』(上, 中, 下)(広文書局, 1993年3月)。
- 『中国古籍善本書目』(上海古籍出版社, 中華書店)。
- 陸心源『儀顧堂題跋・統跋』, 丁丙『善本書室藏書志』など(清人書目題跋叢刊二, 中華書局, 1990年3月)。